

徳富蘆花のイタリア旅行

——ブリンディシからコモ湖畔へ、そして戦争と平和——

岩倉翔子

Abstract

TOKUTOMI Kenjirō, detto “Roka” (1868-1927), noto come l'autore di *Hototogisu (Il cuculo)* (1898) e *Shizen to jinsei (La natura e l'uomo)* (1990), soggiornò per due mesi in Italia insieme a sua moglie Aiko (1874-1957) dal 12 luglio al 10 settembre del 1919, visitando svariati luoghi. Salpato da Porto Said in Egitto egli sbarcò a Brindisi, da dove si diresse verso nord per ferrovia, facendo tappa a Napoli, Roma, Firenze, Milano, Bellagio e di nuovo a Milano. Da qui lasciò definitivamente il paese per recarsi a Parigi, ancora una volta in treno.

Del viaggio rimane una sorta di diario intitolato *Nihon kara Nihon e, (Dal Giappone al Giappone)*, scritto a quattro mani dai coniugi Tokutomi e pubblicato dalla casa editrice Kaneobun'ei-dō di Tokyo nel 1921. In uno dei volumi che lo compongono, intitolato “Occidente”, la parte quinta è interamente dedicata al viaggio in Italia (pp.619-736).

Nel mio saggio ho inteso mettere in rilievo ciò che i due coniugi videro, sentirono, apprezzarono in Italia e come giudicarono il paese, prendendo in esame la descrizione contenuta nel diario. Il periodo del viaggio coincide proprio con l'anno immediatamente successivo alla fine della prima guerra mondiale, in cui fu tenuta a Parigi la Conferenza per la pace. Roka, pacifista convinto, dimostra grande sensibilità nei confronti delle tracce della guerra, perciò il suo punto di vista si può dire assai diverso da quello degli altri viaggiatori giapponesi di allora. D'altro canto, l'autore è un amante della natura e nel diario, quindi, l'aspetto pacifico pure è presente in forma rilevante, laddove, per esempio, descrive i paesaggi italiani che vede durante il viaggio.

Come Roka stesso afferma, il viaggio dei coniugi non aveva uno scopo specifico o un programma predefinito, ma è stato vissuto in modo del tutto ordinario, simile al tempo trascorso nel loro quartiere di Tokyo. Alla partenza dall'Italia gli autori hanno una certezza e scommettono che l'Italia troverà la forza di rinascere recuperando le glorie del suo passato.

Keywords : TOKUTOMI Roka, Italia, Viaggio, *Nihon kara Nihon e*, Guerra

1. はじめに

「不如婦」(1898)¹⁾や「自然と人生」(1990)²⁾などの著者として知られる徳富蘆花、本名健次郎(1868～1927)は、妻愛子(1874～1957)とともに、1919年7月12日から同年9月10

日までの約二か月間イタリアに滞在し、イタリア各地を訪れている。すなわちエジプトのポートサイドを発って海路をとりプリンディシで上陸し、その後鉄道で北上して、ナポリ、ローマ、フィレンツェ、ミラノ、コモ湖畔のベッラージョに、それぞれ滞在して、最終的にミラノを後にして鐵路パリに向かっている。この旅行については、夫妻の共著になる「日本から日本へ」（金尾文淵堂、1921）の「西の巻」の「第五篇 伊太利」（pp.619-786）〔なお以下では、同書の引用・言及等の頁数は本文中に上記のごとく表示する〕に詳しく記されている。以下、共著の旅行記「日本から日本へ」を基に、蘆花と愛子のイタリア旅行を跡付けながら、彼らがイタリアで何を目にし、何を耳にし、何を感じ、そしてイタリアをどのように捉えていたかを検証したい。それに先立ち、蘆花のプロフィールを紹介しておこう。

2. プロフィール

徳富蘆花、本名健次郎は、1868年（明治1年10月25日）、熊本県水俣に父一敬（1822～1914）と母久子の三男として生まれた。七人兄弟の末子である。徳富家は代々惣庄屋兼代官をつとめ、父は横井小楠（1809～1869）の門下で、熊本県政に参画していた。兄は言うまでもなく蘇峰、本名猪一郎（1863～1957）で民友社をおこし、雑誌「国民の友」と「国民新聞」によってわが国のジャーナリズムの草分け的存在となった。甥には同志社総長をつとめた湯浅八郎（1890～1981）がおり、一方母も地方の旧家矢嶋家の出身で、小楠の妻つせ子、熊本女学校長竹崎順子（1825～1905）、基督教婦人矯風会会頭で女子学院初代校長の矢嶋揖子（1833～1925）などのきら星のごとき姉妹に囲まれている。徳富一族は「すぐれた日本の文化家族」³⁾であり、「熱心なクリスチャン家族」⁴⁾であったといえよう。

蘆花は熊本洋学校で学んだが、1878年に兄につれられて京都に行き、同志社に入学した。一旦熊本に帰って、1885年3月に受洗して、敬虔なクリスチャンの生活に入ったが、ただし後に1891年頃からはキリスト教の信仰が冷却することになる。1886年には同志社に再入学したが、新島襄（1843～1890）の義姪との恋を反対されて断念を余儀なくされ、郷里に帰って、後年本郷教会牧師や同志社大学総長をつとめた海老名弾正（1856～1937）が校長職にあった熊本英学校の教師になる。

1889年上京して、兄の経営する民友社に入り校正や翻訳に、翌90年には、これまた兄の創刊になる「国民新聞」に入社して外国電報の翻訳などに、それぞれ携わった。この間兄の主宰する「国民の友」や「国民新聞」、「家庭雑誌」で執筆活動を展開する。後に「自然と人生」などにまとめられた自然観照の小品を発表し、1898年から「国民新聞」に連載された「不如婦」では小説家として認められ、精神的にも経済的にも兄から自立する。なお「不如婦」は1900年に刊行され⁵⁾、後年英・米・独・仏・ポーランド・中国の各国語に翻訳された。1903年には民友社と決別して、黒潮社を設立し、「黒潮第一編」⁶⁾を自費出版した。90年代に入るとトルストイの著作に傾倒し、しばしばトルストイ紹介の筆を執る。なお1906年以降は「蘆花」の号を辞めて、本名「健次郎」を名のっていたが、本稿では混乱を避けるために「蘆花」で統一することにした。

一方実生活の面では、1894年同県人の原田弥平治の次女で、東京女子高等師範出身のインテリ女性、愛子と結婚、ただし終生子宝には恵まれなかった。新生活に入る決意から精細な日記

を書き始めていた。だがかれの場合、日記類を幾度か破棄・焼却している（1905・08年等）。ところで、転居と旅は、かれの生涯の一種の習性であったとさえ言える。それまで点々と居を移していたのが、1907年2月、東京府下北多磨郡千歳村粕谷356番地（現、世田谷区、蘆花公園）を終生の居住地と定め転居した。トルストイの「君は農業によって生活するを得ざるや」⁷⁾という言葉と郷愁が転居の引き金となり、本人の言葉を借りれば「美的百姓」⁸⁾として、一時期きわめて熱心に日々農耕に従事し、トルストイ主義の実践を試みた。その記録が「みゝずのたわこと」（1913）⁹⁾として実を結んでいるといえよう。

旅に関しては、1893年にはじめて伊香保を訪れて二週間を過ごし、以後頻繁に同地に遊んで、1927年の十回目の伊香保行きはすでに重い病床にあつての強行であり、ついに同地が終焉の地となっている。伊香保に限らず国内では、北から南までくまなく歩き廻っている。海外旅行としては、1906年4月、単身横浜から出航し、スエズを経て聖地パレスチナを巡り、6月にヤスナヤ・ポリヤナのトルストイを訪ねて、シベリヤ経由で8月に敦賀に到着した旅[「巡禮紀行」（1906）¹⁰⁾], 1913年9月から11月にかけて愛子を同道して、九州、朝鮮と南満州、山陰まで足をのばした旅[「死の蔭に」（1917）¹¹⁾], 1919年1月から翌20年3月にかけて、夫妻で廻ったイタリアを含む世界一周の旅[「日本から日本へ」（1921）], さらに1922年1月から3月にかけて夫妻で九州、朝鮮を訪れた旅行等がある。

プロフィールに関連して最後に一言触れておかななくてはならないのは、蘆花がキリスト教徒として強腰の人道主義者を貫き、戦争及び死刑の絶対反対論者であった点である¹²⁾。政治や社会的な問題への関心と関与の事例は多数挙げられる。1911年1月、前年の大逆事件で死刑宣告を受けた幸徳秋水らの助命運動をした。1919年4月、エルサレム滞在中には、西園寺公望公、ウィルソン米国大統領、ロイド・ジョージ英国首相ら講和会議出席の首脳宛てに、「所望」（pp.334-345）と題した提案を送った。1924年には、アメリカの排日運動に憤激して、内村鑑三と「太平洋を中にして」¹³⁾を編纂し、また前年1923年12月の摂政の宮狙撃事件いわゆる虎ノ門事件に関し難波大助の助命の意見書を宮内省に上申している。

3. 「日本から日本へ」におけるイタリア旅行

蘆花の著作が、凡そ史伝・エッセイ・紀行・小説に分けられる中で、「日本から日本へ」は、勿論「紀行」の系列に属し、すでに触れた「巡禮紀行」や「死の蔭に」を上回る最大の旅行記である。1920年（大正9）3月8日、二万余円を投じて一年二か月にわたる世界一周旅行から帰国した後、5月1日より夫人と共に旅行記の執筆に取りかかり、翌1921年1月20日に脱稿の運びとなり、3月には、東と西の二巻からなり、全1,454頁に及ぶ共著が金尾文淵堂から刊行された。天金羽二重表紙に本文横組みのユニークな装丁が人気を博したといわれる¹⁴⁾。「西の巻」（すなわちヨーロッパ諸国と北米旅行）の巻頭を占める「第五篇 伊太利」は、全168頁、九章からなる。S.S.Karlsbad, Brindisi から Napoli へ、Napoli, Roma, Firenze, Milano, Como 湖畔, Milano（二たび）、伊太利を後に、の各章であり、章によっては、さらに節に細分化されている¹⁵⁾。日々日記の体裁をとって記されている。

「第五篇 伊太利」は、下記の一文で始まる。

大正八年七月四日 の 午後三時、私共は 南さんの 小艇に 送られて、伊太利行き
の 汽船 Karlsbad に 乗った。約六千噸、ぼるねお丸程の船 である。(p.621)

文中の蘆花夫妻が出航した港はポートサイドである。日本からエジプト旅行を経て、パレスチナを巡礼し、再度ポートサイドに戻ってきていた。同地に在住し、イタリア人の経営する日本雑貨店に勤め、経営者の縁続きのイタリア人女性を妻にもらった“南さん”に万事世話になっていた経緯がある。同地のホテルに滞在中に、「私共は此處で皆のする事を見習って、藁の袴をはかせた伊太利の葡萄酒罎から Chianti を飲む事を覺えた」(p.605)と記している。夫妻にイタリア行きを決心させた決定的な動機はいまひとつ詳らかでない。「私共は兎に角伊太利行きと決心した。伊太利にはよく日本船が行く…伊太利行きの定期船と云ふものは無いが、日本船がよく行くと云ふ。」(p.607) その一方「日本から日本へ」の「東の巻」は次の一文で結ばれている。

獨逸の講和條約調印をさながらのきつかけに、私共を伊太利へ連れて行く船が來た。それは戦争が伊太利の有にしたもとと地地利 Lloyd の船で、會社の事務所も舊のままなれば、船名もまだもとの“Karlsbad”で通つて居る、其船であつた。私共はその船で埃及を後にし、伊太利の長靴の踵に當る Brindisi へ渡らうと謂ふのである。(p.618)

そもそもこの世界一周の旅は、前年の第一次世界大戦の終息による平和の到来で、第二のアダム(日子=蘆花)とイブ(日女=愛子)と自覚し、この年を自ら新紀元一年と宣言して、1919年1月27日、夫婦共々出発した旅である。すでに前年の2月、聖地パレスティナ再訪の決心と、10月には金尾文淵堂と旅行記出版の約束ができていたが、当初予定にイタリア訪問は入っていなかったものと思われる。なお道中、読売や東京朝日両新聞紙上などに旅行記を発表している。

彼らの旅は第一次世界大戦後間もない時期であり、パリ講和会議とも重なる期間もあって、戦争絶対反対論者蘆花の耳目は戦禍の痕に鋭く反応する。旅行記においてその関係の記述が占める割合がかなり高いのである。大戦の参戦国イタリアについても例外ではなく、当時の一般の日本人旅行者とはかなり異なる対象に耳目が引きつけられているという印象を免れ得ないのである。

イタリアに向かう船中で、愛子はカイロで購入したイタリア語の独習本“*Italian Self Taught*”を片手に奮闘し(p.623)、蘆花は、「Milanoに 行くと云ふ、埃及生れの 若い 伊太利人と話す。戦争の話を する。伊太利の爲には 何にもならない。十年以内に、獨逸が復讐すると云ふ」(p.629)と記しているように、先の大戦に注目する。早くもイタリア人の習性をも見抜く。「伊太利人は よく 歌ふ。而して よく 踊る。客の中に 夫婦 娘の 藝人家族がある。日蔭の Passageで 今日も 家族の合唱が 賑やかだ」(p.630)と記す。プリンディシに寄港後船はヴェネツィアに向かうので、このまま水の都に行きたい誘惑に駆られるが、最初の予定通りナポリ、ローマ、フィレンツェ、ミラノと北上することにする。愛子が次の一首を詠む。

伊太利の かがとに 立ちて つまだちて
のぞかんと 思ふ 歐洲の門 (p.631)

4. ブリンディシからコモ湖へ、そして戦争と平和

戦争の爪痕

以下、われわれも蘆花・愛子夫妻の旅を、彼らの「旅行記」の軌跡を基に、追体験してみよう。夫妻は、ブリンディシで上陸してイタリアの地に第一歩を印し、まずホテルの昼食に供された鯛の塩焼きとデザートは夏梨とプラムに大喜びするが、ホテルの化粧室の不潔さと町中で子供から罵声を浴びせられ土塊を投げつけられた一件に、不快感をあらわにする（p.633）。なお後にフィレンツェでも、同様に子供からの投石という不愉快な経験をすることになる（p.728）。早速、二人は戦争の影響を随所で知らされる。上陸後まずイタリア貨幣に換金しようとしてクックの事務所を探すと、戦争で五年来閉店していた。案内人の言によると、「…戦後人気殊に荒く、同盟罷工も頻々で、多少の血も流れた…」（p.633）そうだ。実際、ナポリからボンペイを訪ねようとした折には、自動車で行こうとしたが運転手がストライキ中で実現しなかった（p.633）。汽車の道中でも、戦争の爪痕を見せつけられる。「汽車の硝子窓が破れたままになって居るのも、戦後の國らしい。」（pp.633-634）更に「停車場に兵の爲めの英語の標示が残って居るのも、今の戦争で如何に英吉利の魂が伊太利に入って居たかがトせられる。」（p.634）道中乗り合わせた法定弁護士は、「…此戦争で伊太利は多大の犠牲を拂いつつ何の利益も獲ない」（p.682）とひたすらこぼす。

ナポリに到着するや直ちに、砂糖の制限された供給に不自由を感じ始め、無類の砂糖好きの夫妻にとって、この悩みはイタリア滞在中長くついて回り、代用品を考え出してとんだ失敗をする（pp.685, 705, 708-709, 777）。当初は砂糖不足の実態がなかなかつかめなくて、砂糖を求めて、食料品店や菓子店を次々に探し回った。

…買物に 来て居た 紳士が 紙入から 電車の回数券 見たやうなものを 取り出し、これが なければ 砂糖は 買へぬ、と 云ふ意を 眼顔で語った。砂糖が 切符制度で 制限されて居るのだ。獨逸では 覺期して居たが、伊太利、殊に 平和になった今日 伊太利では 一寸 案外であった。私共は 今 本當に 戦争上りの國 に 来たのだ。（p.639）

実は、物資の不足は砂糖に限ったことではなく、ヴェスビオ訪問の帰途、通りがかった煙草屋の店先の長蛇の列からも察せられた（p.653）し、ローマで墓口を買おうとしたが、「戦争のお蔭の 革拂底で、碌なものはない」（p.694）ということになる。

ナポリのホテルのバルコニーから下の往來を眺めている間にも、戦後を実感させられる。「朝早く 馬糞など ちらばってる 下の通りを よく女が 箒で掃き清めて居る。戦地の 罹災者に 生活の便を 得さす爲に 政府が 各地に分けて、かかる仕事を もさす…」（p.641）。さらにローマでも本来男性の職域とおぼしきものを、女性が代行する姿が目につく。「電車の車掌も居る。十七八の娘が 赤條入りの黒の制服着て郵便を配達して居る。汽車で 旅しても 大きな停車場につくと W. C. の掃除は 皆女がして居る。氣の毒に思ふ」（p.707）という。このように、戦争の後遺症や日常生活を見つめるまなざしは実に鋭い。

ローマ滞在後、8月後半は避暑にスイスへと企てたが、スイス公使館で「…瑞西も 食料節約で二日以上滞るは 本國へ 照會の上ならでは 許されず、電報往復でも 約二週間を見つもらねばならぬ…」(p.723)と言われたので、スイスはパリ行きの通過にとどめ、その代わりにコモ湖行きとなつたらしい。そのコモ湖畔の地では、大きなホテルはいずれも閉鎖していたし(p.742,750)、ミラノのホテルでも戦後の修理工事が行われていて、汽車の切符発売所や館内郵便局が閉鎖中であり、玄関ホールの床モザイクも修理の最中であった(p.781)。上記のごとく、二人の道中にはここここに戦争の災禍が認められるのである。

自然観照

この辺りで戦争の爪痕から目を転じてみよう。汽車の旅の始まり、プリンディシからメタポント、ポテンツァ、サレルノを経てナポリに至る車窓から見える景色は、蘆花の筆で鮮やかに活写されている。「美的百姓」を自認するだけあって、自然描写に長けているし、すぐれて平和的であり、植物の知識が非常に豊富である。「山を 彩って 黄金の叢又叢、野生エニシダの花盛りである」(p.634)とか、「沿道の崖腹に、栗の大木が ふさ ふさ と 花を かぶって居る」(p.635)とか、サレルノ近郊の景色を、「柘榴、葡萄、桑、無花果、其他の果樹、芭蕉や 棕櫚の 園が、緑は緑に接し、別墅風の家 點點として、顧みれば 山の上、山の腹、色美しい 建物が 風景を 彩どって 居る。阪神間の 御影住吉あたりの 氣もちがする」(p.635)と、記している。カプリでの水の色的美しさを、精緻な観察眼で絶賛する。

それは 安南沖や 印度洋で 見た海の色とは また 異った 碧色で、本当に美しい。前者は少し 紫が 勝ち、此處のは 青が 勝って居る。練りもののやうに ねとねととして、手で掬んだら 手も染まり、白絹を 浸けたら 絹が碧地に 染まりさう。空気が清く、空の色が 美しいから、海が斯く 美しいのだ。私は 景色の好い 日本でも、此様な 美しい海の色を 見た覺がない。(p.658)

ナポリとローマ間での車窓には、雨後の濡れた緑の中に「蕨がある。野ひなげし が 咲いて居る」(p.683)と、目で追い続ける。フィレンツェからミラノに向かう道すがら、汽車の車窓からの景色を賞でる。「Bologna からは 平野。 葡萄畑が 迎へて送る」(p.733)、そして「水田の 緑緑したのを見て、瑞穂の國の 日子日女は 言ひ知れぬ 悦喜に 満たされる」(pp.733-734)と、記されている。

蘆花夫妻は、ミラノ駅に来て夥しい数のトランクを見て、初めてヨーロッパに来たことを実感したという(p.735)。そのミラノの地で、日本を出て七か月、中休みの地として、コモとレッコ両湖の叉に位置して、景勝の地のベッラージョに行くことを、ベデッカーの案内書をもとに決めた。ミラノからコモまでは汽車の旅、コモからベッラージョまでは船旅であり、その間の風景描写は、この旅行記中でも最も印象的な箇所のひとつと言えよう。

此山の高さ、此谷の狭さ、此水の深さ では、陰氣な 物凄い景色で あらねばならぬ處を、陽氣な伊太利人は、其水に傍ふて 色彩といひ 様式と云ひ ぴったりと 周圍に

調和して 而して それを 明るくする 別荘やら 寺やら 住家やらを 建て、樹色花容の 美しい植物を 植ゑ、其峻しい 崖に 自動車の 走る路をつけ、其湖に 軽く水を載って 往復する四五隻の美しい汽船と 小さな 帆船と 漕船を浮べ、人なつこい 遊園にしてふた。(p.738)

支那風の 石の丸橋に 緑蔭這ひ、 白糸の瀑とでも 云ひさうな 小瀑が 掛ったり、藤の花が 今を盛りに 咲いたり、 薔薇、グラジオラス、 蝦夷菊、ダリア、 杏竹桃、 さまざまの花が 色を競ふて 咲いて居る。心憎い水荘、 水門内に ボートを 繋いで、誰が 住むかと 眺められる。(pp.738-739)

…此山 此水 此家 此人 此船を眺めて、自然を己が有にする事に於て、伊太利は 殆んど 行く所まで 行き、我等の郷國は まだまだ前途多望だ… (p.739)

園丁の案内で、庭園を 見て廻はる。南面して 日あたりの好い、コモ湖畔で 一番暖かいと云ふ 丘腹を占めて、大きな 泰山木、大きな 石楠花、躑躅や 日本物と云ふ 椿などが 鬱葱と 茂って居る。泰山木の花ざかりは 嚙芳しい事であらう。石楠花や 躑躅の盛りの色も 偲ばる。黄土色に塗った 邸宅の周囲の 明るい處には、花壇の花が 色美しく 咲いて居る。寒おほひは するであらうが、レモンなど 生って居る。園丁が 五六人も 立働いて居た。此處から 私共の Bellagio を見ると、緑の大蛇の 湖水に 水飲むやうな ゆたゆたした半島、それに據って 水から 浮み出たやうな白壁紅樓參差として、畫にかいたやう。(p.759)

「何處の寺でか 鳴り出した 夕の鐘の 琳琳と 好い音が 水を渡って響く」(p.739)のごとく、視覚ばかりでなく聴覚の快感をも楽しむ。

日曜で 寺の 鐘が 鳴る。頭の上の寺で、面白い 拍子をとって鳴る。向ふ岸の カデナツビアの方からも 水を渡って 鐘の音が来る。此岸の 次の村 San Giovanni の方からも 響いて来る。唯の鳴り方ではない。正に合唱だ。Art が髓に入っている国民で、お寺の鐘にも 歌を 歌はせねば 安心が 出来ないのだ。(p.751)

更に、ミラノ滞在中に訪れた大聖堂でもかれらの関心は、もっぱら塔から遠望できる景色にあったとみられるが、アルプスの連峰はもやがかかって見えなかったもので、大いに失望する(p.778)。いずれにしても、蘆花の自然描写は、すぐれて絵画的で、蕪村的であって、芭蕉的ではないといえよう。

名所旧跡と造形芸術作品

ところで名所旧跡と古今の造形芸術作品の宝庫たるイタリアで、いったい夫妻はそれらとどのように向き合っていたのであろう。ポンペイの見物を、「…しなくてもよいが、萬更 見ない

と さて 気が済まぬ」(p.663)と消極的な姿勢で臨み、終わりには「“死の市”の見物に饜いた」(p.669)といて、見物を打ち切る。ローマのサン・ピエトロ広場のコロネード、寺と法王宮については、「廣場から 寺を 見上げた 觀望は、廻廊が 大袈裟過ぎる上に、Dome が小さく、前にも云ふた 手長猿でも 見る様で、あまり 好い感じでない。法王宮の 建物が 寺院に くつつき しがみついて居るのも 氣障である」(p.689)と、気にいらなようだ。コロッセオの流血の歴史には今大戦の流血を重ね合わせる (p.694)。

レオナルド、ミケランジェロ、ラファエッロのいわゆるイタリア・ルネサンスの三大美術家の評価に、耳を傾けてみよう。システーナ礼拝堂のミケランジェロの「最後の審判」について、「右の腕を 振り上げた 基督が 私の意に 満たぬ。やや 下手に 聖母を配してあるのは、審判の座にも 女性を要する 自然の告白であらう」(p.700)として、やや失望し、天井画は「あまり ごちゃ ごちゃして 小うるさい感がある」(同所)と、また次のようにも記すが、一番のお気に入りには「人の創造」(アダムとエヴァ)という。(p.701)

…一つ 一つに 眺むれば、流石に 逞ましい 天才が 34歳から 38歳迄の 氣力横溢した 時代の 作と 頷かれる。其 Brush は さながらの 鑿で、個個の人體は 力の美を極め、創造の 驕喜が 一つ 一つ に 溢れて居る。(pp.700-701)

ラファエッロの方が一層氣にいる。署名の間の「アテネの学堂」を特に賞賛する。

哲學を描いた それは、“詩”を描いた それ(「パルナソス」=筆者加筆)よりも ヨリ詩的で美しい。“Disputa”の基督の顔は あまり Effeminate で、M の Last judgement の基督が 私の氣に入らぬと 異なった意味で やはり氣に入らぬ。(p.701)

蘆花の結論は、「二人を 一緒に つきまぜて」(p.702)、はじめて自分の意に添った代物が生まれるかもしれないと言うのである。「自然は 配偶を好む。M と R とは、まことに恰好の夫婦 であった」(同所)と結んでいる。フィレンツェのアカデミアにあるミケランジェロ作の「ダヴィデ」に対しては、情熱を込めて賛美しているので、その言葉に耳を傾けよう。

…“David”の 若い美に 今更の如く うたれた。Napoli の 美術館で、希臘藝術の Apollo を 美しと見たが、“David”は もっと 生きて居た。Michelangelo が 廿七歳の秋 から 二年四ヶ月 かかって 造り上げた 此“David”は、即ち Michelangelo 彼自身なのだ。人は 自己以外のものを 創造せぬ。Michelangelo の David が Michelangelo で ある に 不思議はない。以前の 彫刻家が 没義道に 深く 鑿を入れて 疵物にした 無恰好な 大理石の 大塊から、此大きな 美しい 生きたものを 鑿り 出した 愛の腕力は、げに 素晴らしい ものである。全く生きて居る。血が出さう。釋尊が 説法前に 額の白毫から 光明を放った やうに、今大敵に向って 自信の一石を 投げんとする 美青年の 四肢 五體、筋と云ふ筋、肉と云ふ肉、活動前の生命の 意志に 顛へて居る。Sistine Cappella の 大壁畫大天井繪に 假令如何様な 批

が入っても、此 David は ほめずに 居られぬ。(pp.730-731)

この作品を見ただけで、フィレンツェに寄った甲斐があると大いに満足する (p.731)。ミラノではもちろんレオナルドの『最後の晩餐』を見て、次のように記している。

“最後の審判”に 於ける Michelangelo の 耶蘇, “Disputa”の Raphael の耶蘇に比して、此 Leonardo da Vinci の耶蘇は Vinci 自身を 語って 居るから 面白い。M の意, R の情, V の智が 争はれぬ 確かさを 一基督の上に 表はして居る。(p.780)

このように各地で名所旧跡を訪ね、造形芸術作品を鑑賞しているが、おそらく蘆花には自然の方がより好みだったのではなからうか。

「粕谷の生活の延長」としての旅

プロフィールにおいても触れたように、蘆花は一種の旅の達人であり、国内は勿論のこと、かつての外地に二度、いわゆる海外旅行をも経験して、実に旅慣れている。蘆花自身が明言しているように、夫妻の旅は、東京の自宅のある「粕谷の生活の 延長で…飽くまでも 氣まぐれ旅行で、Programme などつくって 見物の義務は一切 負わない」(p.688)。「粕谷の生活の延長」の姿勢は、あたかも通奏低音のごとく、旅行中終始貫かれていたのではなからうか。むさぼるように名所旧跡や美術品を見て回るのではなく、あくまでも普段の日常生活のリズムを大切にしながら、生活を楽しみながら旅を続ける。ナポリでは、現在なお街角で見られるイタリアの風物詩を目撃し見つける。「街頭に 玉蜀黍を 焼いて 賣って居たり、葉つきの レモンを 飾って レモン水を 賣る 屋臺店などが 私共の眼を牽く。」(p.639) また早速書店で「伊英袖珍字典」(同所) いわゆるポケット版辞書と「ナポリの英語案内記」(同所)を購入しているが、行く先々で訪問地のガイドブックを求めて (p.708)、研究する。おそらくそれを基に、旅行記における地名・人名いわゆる固有名詞の表記を転写しないで原語のまま記し、歴史的な記述やデータなどもかなり精確である。

市に出かけては、気軽に買い物を楽しみ、特にほとんど毎日欠かさず西瓜を買ってきては、各地で味を食べ比べ品定めする。イタリアを北上するほど甘みが濃くなり、美味という (p.734)。ベッラージョでは散歩の途次、畑にいた百姓と交渉して玉蜀黍やトマトまで直接買い入れ、玉蜀黍はホテルで焼かせる (pp.754-755, 757)。彼らの旅行は、まさに「日常生活の延長型」旅行といえよう。

おそらく蘆花のこの旅の姿勢は、とりもなおさずかれの生き方を反映し、たとえば森鷗外や夏目漱石のいわゆる官学系列と異なった若き日の形成期を通過し、終生官界と距離をおいていた在野の自由人であったことと無関係でないかも知れないのである。

5. むすびにかえて

イタリア滞在の最後の夜は、「伊太利で 圓かな月を 二回見る。私共の 伊太利は 思ひの外の長逗留で あった」(p.782)の一節で結ばれている。9月10日、ついにイタリア出発の日の蘆花自身の言葉をかりて、むすびに代えたいと思う。

九月十日。今日は 伊太利を 去る日である。日本を立つ時、伊太利は 私共の 頭になかった。往ってもよい、往かなくても、とさへ思ふた。然るに 坡西土に 着くと 直ぐ 伊太利関係の 南さんの 世話になり、カイロに行けば Venezia 生れと云ふ女中の世話になり、果ては 伊太利の船に 乗って Brindisi に 上ってから、Napoli, Roma, Firenze, Milano, Como, Bellagio, また Milano と 悠悠 ここに二月餘を 伊太利に過ごしたのは、全く 案外で あった。然し 案外では あったが、不思議でも 何でもない。日本に よく 肖た 伊太利、日本を 歐羅巴に押出したやうな伊太利、それを 私共は見過しに せられうか？ 其處の自然、其處の歴史、其處の藝術は、必しも 私共を 酔はせも 厭倒しも しなかった。然し 二ヶ月の 逗留は いやでも私共を 伊太利の命脈に 觸れさせた。伊太利を 見るのは、日本を 省みるのだ。伊太利を 鏡にして、私共は そこに 色色の 明示 暗示を見た。一國の 問はるべきは、如何に 多くの過去を有つかでなく、如何に 多くの 未來を 有つかである。…大なる過去を 有つ事は、必しも 大なる未來を 保證せぬかはり、また 大なる 將來を有たぬ 證左にも ならぬ。

伊太利は 光榮ある 過去をもつ。大なる將來を 彼女は 有つであらう乎。私共は Vesuvio Etna を 有つ 彼女の内的生命を 疑ふ事は 出来ぬ。彼女は 自ら 新にすべく 奮ふて 居る。彼女の 努力は 報ひられる で あらう。私共は 彼女の 未來を信じ、祝福を以て 今 伊太利を 去る。(pp.783-784)

* 徳富蘆花がイタリア滞在中、活発な政治活動を展開した作家として知られるガブリエレ・ダンヌンツィオ (Gabriele D'Annunzio, 1863-1938) にしばしば言及し、強い関心を抱いていたことはその旅行記からも知られ注目に値するが、本稿で扱うには紙数の制約もあり、その点に関しては稿を改めたい。

注

- 1) 「國民新聞」に1898年11月29日より1899年5月24日まで連載。
- 2) 民友社、1900。
- 3) 神崎清、『徳富蘆花』、『明治文学全集42、徳富蘆花集』、筑摩書房、1966、p.377。
- 4) 同所。
- 5) 「小説不如歸」民友社、1900。
- 6) 驚醒社、1903。
- 7) 「順禮紀行」—ヤスナヤ、ポリヤナの五日一、《初対面》、前掲「明治文学全集42、徳富蘆花集」、p.173。神崎清、『解題』、同書、p.405 参照。
- 8) 「みゝずのたわこと」、同書、p.200。神崎清、『解題』、同書、p.404 参照。
- 9) 新橋堂・服部書店・驚醒社、1913。

徳富蘆花のイタリア旅行（岩倉）

- 10) 驚醒社, 1906。
- 11) 大江書房, 1917。
- 12) 野田宇太郎, 『徳富蘆花』, 「明治文学全集 月報 16 第 42 卷附録 昭和四十一年五月」, 筑摩書房, p.4 参照。
- 13) 文化生活研究会, 1924。
- 14) 神崎清, 『年譜』, 前掲「明治文学全集 42, 徳富蘆花集」, pp.418-419 参照。
- 15) 各節は次の通りである。「第三 Napoli」には, 其一 ナポリの日記, 其二 Vesuvio, 其三 Capri の嶋, 其四 Pompeii 一瞥, 其五 Napoli の一夕, そして「第四 Roma」には, 其一 羅馬へ, 其二 羅馬日記, 其三 羅馬日記（續）が, それぞれ含まれている。

徳富 蘆花・愛子の旅程

[1919年7月4日午後4時過ぎポートサイド発・海路(アレクサンドリア・クレタ島・コルフ島経由)]

7月	12日	天明	プリンディシ	着	
		am. 8:00	ク	上陸	Hotel Central
	13	7:30	プリンディシ	発・鉄道	
				(ターラント・メタポント・ポテンツァ・サレルノ経由)	
		pm. 10:00頃	ナポリ	着	Hotel Continental
	19		ヴェスヴィオへ		ク
	20		カプリへ		ク
	22		ポンペイへ		ク
	23		ナポリの芸術家との懇談		ク
	24	am. 10:00	ナポリ	発・鉄道	
8月		pm. 3:00	ローマ	着	
		ク 4:00頃		着	Excelsior Hotel
	16日	am. 8:00	ローマ	発・鉄道	
		pm. 2:00	フィレンツェ	着	Hotel Savoia
	19	am. 6:20	フィレンツェ	発・鉄道	
		pm. 3:00	ミラノ	着	Hotel de Ville
	21	pm. 12:30	ミラノ	発・鉄道	
		pm. 2:00	コモ	着	
		pm. 4:00	コモ	発・汽船	
		pm. 7:30	ベッラージョ	着	Hotel de Florence
	22 ~		ホテルに滞在中の本家のトルストイ伯爵一族 と知り合う 同上ホテル		
	28		湖畔のカデナツビアへ	ク	
9月	29		ク レツェーノへ	ク	
	1		ク ヴァレンナへ	ク	
	3		ク メナツジョへ	ク	
	4	am. 5:30	ベッラージョ埠頭へ		
		夜明け	ベッラージョ	発・汽船	
			ヴァレンナ	着	
			ヴァレンナ	発・電車	
	(am. 7:50	レッコ	着)		
	am. 9:20	ミラノ	着	Hotel de Ville	
	pm. 4:00過ぎ	ホテル	発		
	pm. 5:25	ミラノ	発・鉄道、パリに向けて		